
SNOW

涼瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S N O W

【Nコード】

N 1 8 8 1 E

【作者名】

涼瀬

【あらすじ】

ある日母親を殺された少女^{かがみゆき}華神雪全てに絶望している天才^{しらつきゆ}白月有希^き、雪の母親を殺した少年^{ゆき}夕紀入り混じり、交差し全ての物語の始まりとなる物語

始点

いつから始まったのか分からない。誰が決めたことか分からない。神様が決めたことかもしれない。貴方と私はどうして出会ったのかな。

たくさん涙を流すため？色んなものを失うため？

笑顔はありました。貴方はあまり笑ってくれませんでしたね。

いつもぶつかってばかりでしたね。それでも私の中に貴方の笑顔は確かに残っています。

これが悪魔の悪戯でも、神様の気まぐれでも、私は貴方と過ごした日々を忘れません。

だから少しでもいいから最期に貴方の微笑を刻み付けさせてください。

これが私の貴方への最後のお願いです。

終止符

辺りには真っ白な桜が舞っている。

樹の根元には二つの人影。

二人を囲むように少年達が寝転んでいた。

黒髪をなびかせて二つの影を見上げる少女がいた。

「お願い、やめて、私が死ぬから、あなたは生きて。」少女は消えてしまいそうな声で影に話しかける。

綺麗な黒髪に純白のワンピース。

瞳は全てを包み込むような漆黒。

花見にでも出かけるような姿には似つかわしくない大きな赤い花。

身体は動かないらしく、それでも影に向かって身体を動かそうと息を切らしながら向かって行く。

「雪、来ないでくれよ。俺はもう決めたから。いや、決められていたんだよ。」

いつか分からない昔から、みんなを手伝うために生まれてきたんだよ。

俺は今幸せだからいいんだ。お前はまだ幸せを掴んでいないだろう。ならちゃんと捕まえて生きていけ。

さてここで問題です、この世界で魔法を使うのに一番大切なことは何でしょうか、答えろよ雪。」

少年は諭すように優しく訊ねる。

「そんなの分からないよ、お願いだから止めてよ。ねえ、夕紀^{ユキ}私も一緒にしてよ、女の子に優しくするのが信念なんですよ。」

「さようならだよ、雪。半年も経ってないけど幸せだったよ。

自分の使命を忘れてしまいうくらいに。

螢火、白銀、白夜、雪の華降りし夜に姿顕すのは天壤の羽衣、七色の天使いの涙。『天束の掛け衣』

最期に言うな、好きだよ。

死ぬのが怖くなるくらいに、じゃあね、雪。

こんな酷い奴なんか忘れていい奴を見付けろよ、すぐに見付かるよ、

お前ならな。やっぱり、妬いちやうや。」

途端に視界が消えていくのが分かった。目が覚める頃にはあいつも居なくなることも。

「待って、いけないで・・・」

最後に見たあいつは微笑みながら心臓を奪われていた。

高校一年生になってはや二月。

私、華神 雪（カガミ ユキ）は遅くなってしまったクラブから帰るためにいつもの通学路でなくて裏道を通って帰ろうとした。

それが全ての始まりだとは知らずに・・・

始点

時計を見ると10時を過ぎていた。一般人は遅くとなると犯罪が増えるので外出しないように言われている。

親がうるさいので仕方なしに路地を走っていた。

視界に男の人と話をしている親友の鈴の姿が目に入った。

二人はこそこそしながら会話をしている。

不思議に思って近付いていくと袋に入った粉を男が鈴に渡すのが見えて急いで走った。

その間にも鈴は財布からお金を取り出していた。

「鈴、逃げるよ。早くして。」鈴の手を握って男と振り向き様に火炎球を放った。

男は当たって吹き飛んで壁に体を打ち付けてうずくまった。

鈴が何か言っているけど走り続けて駅に着いた。怒ろうと鈴のほうを振り向くと頬っぺたを叩かれた。

「どうしてお金も渡してないのに逃げたのよ、有希さんが死んじやったらどうするのよ。」って泣きながら叫んでくるから叩かれたことも忘れてしまった。

「さっきの人は白月^{シラツキ} 有希^{ユキ}という人でね、私の持病を軽減させる為の薬を売っていてくれたの。

ただ希少価値が高くて生えているところがSSランクらしくて普通

の人は帰ってくることさえ難しいらしいの。

最初は何も思わなかったんだけど会う度に身体にあちこち怪我があって聞いても何でもない、としか言ってくれなくてお父さんに葉を見せたら中央最高医院でもなかなかないくらい貴重だったみたいで何かしたくて有希さんのこと調べたら孤児院出身みたいで生活費を自分で稼いでるのが分かったから私は助けてもらってるからお礼がしたくて無理矢理もらってるの。」

落ち着きを取り戻した鈴は目を赤くしながら言い終えて缶のココアを飲んでいる。

私は自分のした軽々しい行動を後悔した。

「ごめんなさい、私酷い事しちゃった。有希さんにお詫びがしたいんだけど次はいつ会うの。私もついていきたいんだけど。」

鈴は驚いた顔をするとうすぐに笑い出した。

どうしたらいいのか分からずおろおろしていると落ち着いた鈴が「有希さんうちの学校だよ、しかも同じクラスだし」と笑いながらサラッととんでもない事を言った。

「そんな人居たの。私今まで知らなかったよ。」

「本当に知らないの？席も後ろなのに」

「ウソおとおおおとおお」

結局その日はお父さんに泣き付かれました。

鈴と一緒に学校に歩き始めた。

「雪って賢いけど抜けてるよね。」

「だって、男の子なんて和星しか知らないし。
男の子ってなんか怖いし。でも『不動の碑王』って人には会ってみたいかな。」

「あ、分かる。かなり強くてカッコイイってきいたよ？しかも自分だけの魔法が使えるらしいよ。あと禁術も政府公認なんだって。」

「でも禁術はだめでしょ？自分が魔物になっちゃうし。」

「だよね、でも有希さんならありかも。」

「有希さんのこと好きなの？」

聞くと途端に顔を俯いてりんごみたいに真っ赤にしてしまった。

「今日からやっと魔法が使えるね。」

しばらくしてもショートしっぱなしだったから話題を変えた。

「そうだねえ、やっと魔法使いだね。」

「追試大変だった。大学ノート5冊も使っちゃったし。」

「まぬけだよ、おとなしく98点とればいいのに場所間違いで2点とかありえないし。」

「言わないでよ。そのせいでお小遣い消えそうになったんだから。」
なんてしようもない話をしていると聖徳高等学校に着いた。

「でも嫌だな、昨日知らなかったとはいえ火炎球当てちゃったから。怒ってたらどうしようかな」

「大丈夫だよ、有希さん優しいから許してくれるよ。」

「うん、でもなんで有希さんって呼ぶの？仲良いんでしょ？」

「そんなことないよ。」

あんまり話もしないし、お薬もらうときは場所に行けばもう来てるし。アドレスも知らないし。」

「携帯とか持ってないんじゃないの？」

「ううん、前誰かに電話してる姿見たことあるし。しかもうれしそうだったし。」

「がんばって、慶なら大丈夫だよ」

「そっかな、自信ないよ。」

「とにかく当たって砕けろ、だよ。」

「砕けたくないよお。」か弱い声を出しながら目を潤ませてこっちを見てくる。

不覚にも萌えてしまった。

一瞬、空気が張り詰めた。

今でも覚えているこの感じ。

見た者を魅了し『死』を匂わさないで刹那に死へ誘うこの言い表せない感じ。

何も考えないで走り出していた。慶が何かを叫んでいたように聞こえたけど走り続けた。

あいつの感触が甦る。

お母さんを呼吸するように、虫けらみたいに殺しておいて私には『ごめん』なんて言葉で終わらせた殺人鬼。

生まれて初めて自分にもこんな怖い感情があるなんて知った。

お父さんの歯を食いしばって耐えている姿なんてあれっきりだった。

無意識に形見のお守りをきつく握り締めていた。

火炎球で扉を吹き飛ばした。そこには漆黒のロングコートを着たあいつが居た。

風が屋上に押し寄せてきた。風になびかれて顔を覆いつくしていたフードに光が差し込んだ。

見えたのは憎しみと怒り、拒絶を表したかのような黒とお母さんを殺したときの返り血を思い出させる深紅の入り混じった瞳。なにも考えないで魔法を使っていた。

「亡きし者の御加護に護られし御言葉、遺されし者に積年の願い見届けよ、汝の御力借りんとするは華神雪。『聖霊の洗^{セイレイノコウロウ}籠』」

詠唱し終えてもあいつは動こうとしない。

光の剣があいつを包み込んでいく。

これが10年間必死に敵を討つために覚えた上級魔法。

教師でも食らえば即死、防御魔法も打ち崩すし重傷にできる。

魔力の使い過ぎで意識が朦朧とする。

煙が消えて現れたのは無傷なあいつ。

「解き放て『葉桜』」低い声で言ったと思ったら深緑の葉桜が現れた。

私はこの魔法を知っていた。見たのは二度目。お母さんが殺された時も同じ魔法だった。

今度は他の誰でもなく自分が殺される。そう分かれると自然と何も感じなくなった。

轟音が響き渡った。

いつになっても痛みがない。でも目が開けられなかった。

「クソヤロウが、母親の次は雪かよ、人殺し。」目の前には良く見慣れた真赤な髪と白髪と黒髪の入り混じった髪。その姿を見ると涙があふれた。

「和星、校長先生。」和星はいつもの子供っぽい笑顔を見せてくれた。

「君は華神君のそばに居なさい、相手が悪すぎる。」校長先生は諭すように優しく和星を促した。

初めは渋っていたが大人しく従った。

それから校長先生は微笑んでから前を見据えた。

「どうしてこんな学校にいらしたんですか、碑王さん」

その言葉に驚いた。驚いているうちにも二人は戦っていた。

「白銀、光沢、嗜好の意思表して我封す。『光輝コウキノフウケンの封剣』」

数十の剣があいつに降り注ぐ。それを避けて行くがとうとう避けられなくなった。

「蓄えろ『蕾』」

突然桜の蕾が現れ剣に刺されていくが次の瞬間蕾が咲いた。

桜の花が撒き散らされた。

『火焰』先生が辺りを焼き尽くす。

しかしあいつの姿はなかった。

「せんせ・・・」あいつが先生の背後に右手に魔力を圧縮しながら殴りそうな姿が見えた。

封魔を使って間に入り込んだが避け切れずに髪が切れた。

栗色の髪が床に落ちた。

「死ねよおおお」と西洋剣を持ち和星が切りかかった。

それを日本刀で受け流した。

『六亡星の封じ手』五色の光があいつを囲んだ。

校長先生がすかさず最後の光を放つ。

「早く逃げろ、華神、鳥城、不藤。お前たちには無理だ。校長も早く逃げてください。」

学年主任の柊先生が見えた。

「柊君、私は大丈夫だからこの子達をお願いしましたよ。」その言葉聞いて柊先生は私たちを連れて離れた。

「なんでこの姿で学校に来たのかな、不動君。君はまたあの子を苦しめるつもりかい。」

先ほどとは違い穏やかな表情の校長が居た。

「あっちからだよ、仕掛けてきたのは。」聞こえてくる声は幼い。しかしすべてを拒絶しているかのように冷たかった。

「何回使った？」

「11だよ、余裕だろ？この最強の称号を持つ俺にはいいハンデだろ。」

「分かっているのか、お前は後3回で魔物なんだぞ。」

「俺にはお似合いだろ？今でも殺人鬼なんだから対してかわらないよ」

その声には皮肉が込められていた。

「あの子を救ったのになんで怨まれないといけないんだ。」

切なそうに出てきた言葉にその少年は答えた。

「俺が『不動の碑王』だからだよ。ただそれだけだ。」

「刹、お前はどれだけ親不孝なんだよ。」

泣きながら校長は尋ねていた。

「刹は死んだよ。10年前にな。じゃあな校長先生。」

そう言って姿を消した。

「刹、いつになったらお前の枷は神様が外してくださるのだ」

答える者は居なかった。

終焉

辺りには真っ白な桜が舞っている。

樹の根元には二つの人影。

二人を囲むように少年達が寝転んでいた。

黒髪をなびかせて二つの影を見上げる少女がいた。

「お願い、やめて、私が死ぬから、あなたは生きて。」

少女は消えてしまいそうな声で影に話しかける。

綺麗な黒髪に純白のワンピース。

瞳は全てを包み込むような漆黒。

花見にでも出かけるような姿には似つかわしくない大きな赤い花が
お腹に咲いていた。

身体は動かないらしく、それでも影に向かって身体を動かそうと息
を切らしながら向かって行く。

「雪、来ないでくれよ。俺はもう決めたから。」

いや、決められていたんだよ。いつか分からない昔から、みんなを
助けるために生まれてきたんだよ。

俺は今幸せだからいいんだ。お前はまだ幸せを掴んでいないだろ。

ならちゃんと捕まえて生きていけ。

さてここで問題です、この世界で魔法を使うのに一番大切なことは何でしょうか、答えろよ雪。」

少年は諭すように優しく訊ねる。

「そんなの分らないよ、お願いだから止めてよ。ねえ、夕紀^{ユキ}私も一緒に殺してよ、女の子に優しくするのが信念なんですよ。」

しかし夕紀と呼ばれた少年は何も話さない。

「さようならだよ、雪。半年も経ってないけど幸せだったよ。自分の使命を忘れてしまいうくらいに。」

螢火、白銀、白夜、雪の華降りし夜に姿顕すのは天壤の羽衣、七色の天使の涙。

『天東の掛け衣』最期に言うな、好きだよ。

死ぬのが怖くなるくらいに、じゃあね、雪。こんな酷い奴なんか忘れていい奴を見付けろよ、すぐに見付かるよ、お前ならな。

でもやっぱり、妬いちゃうや。」

途端に視界が消えていくのが分かった。

目が覚める頃にはあいつも居なくなること。

「待って、いかないで・・・」

最後に見たあいつは微笑みながら心臓を奪われていた。

高校一年生になってはや二月。

私、華神 雪（カガミ ユキ）は遅くなってしまったクラブから
帰るためにいつもの通学路でなくて裏道を通って帰ろうとした。

それが全ての始まりだとは知らずに・・・

終焉（後書き）

よければ投票お願いします

交点

結局私たちは特別休暇になったらしい。

私はあの後すぐに倒れてしまったらしい。

私をはじめに見たのは清潔そうな白い天井と椅子に座って寝ている慶だった。

「せんせえ、雪のやつ起きました。」という和星の聞きなれた声だった。

大丈夫か、と不安そうに顔を覗いてくるので出来るだけ元気に答えた。

それでもまだ不安そうだったがそのまま先生のところに歩いていった。

連れてこられた保険の先生は顔色を見た後に体温計を渡して測るように言われた。

なにも考えずにただ窓の外を見ていると慶が目を覚まして飛んでき

た。

「雪大丈夫？顔色悪いけど。力になれなくてごめんね。どこも痛くない？おなかすいてない、おトイレに行かなくても大丈夫？お風呂に入る？和星になにかされてない？」

と後半はあまり関係なかったけれど大丈夫だよ、和星にお尻触られたけど。と言うとすごい剣幕で和星に言い寄っていた。

その後冗談と伝ええると紛らわしいことしないでと理不尽に怒られていた。

なんてみんなとじゃれ合っていたら柊先生と校長先生が入ってきた。

立とうとしたらそのままいいと校長先生に言われたのでそのまま話を聞き始めた。

「今回の事は本当にこちらの警護管理がいきとどいておらんくてすまんかった。

相手は知っているとと思うが『不動の碑王』（フドウノオウ）じゃ。

何をするためにこの学校に訪れたかは分からぬがおそらくIMの差

し金だと思う。

どうにかしたいのは山々だが世界政府となるとそう易々とこちらの意見が通るとは思えぬ。

なので今回関わった三人にはエマージェンシープレートエマージェンシープレートを渡しておく。

魔力を注いでくれればすぐに私か柊君がその場に移動できる。

本来はある程度の魔術の扱えるようになった7月から配布するのだが今回は事情が事情なので渡しておく。

それから普通は一般教員が行くのだが特別に私たちが行く。

それにみな魔法レベルが高いので大丈夫だろう。

今日はもう遅い一人一人送っていくよ。では柊君頼んだよ。」

そう言って転移魔法を使い消えてしまった。

その後私達は重たい沈黙の中でそれぞれの家に送ってもらった。

夕紀と和星

KAZUHO SHI SIDE

柊先生に送ってもらった後腹が立って家にも帰らずに街をぶらぶらしていた。

無性に苛ついて人にぶつかったら片っ端から魔法を使って叩き潰していた。

ドイツもコイツも吹っ飛んで気絶して終わりだった。

すこし強めの魔法を出したら強がっていた奴は漏らしてそのまま気絶してそれで終わり。

そこら辺の奴よりは強いのに雪を泣かしたあいつにはまったく及ばないことが分かりたくないのに身体が感じていた。

『そいつに関わるな。殺される。』

本能が分かっていた。情けないけど震えていた。あいつの為に強くなることを決めていたのに力になれなかった。

結局先生に助けられて、自分が助かったことを素直に喜んでしまった。

そのことを理解しているから八つ当たりしていた。

それから力が欲しくてギルドに向かった。

「Bランクの依頼ない？」いつも通っているギルドに着いて普段より高い依頼を探してみた。

「和ちゃん、Bはまだ早いからやめときなよ。」

と親しい仲介屋に止められた。

「大丈夫だよ、たかがクラストン20匹なんか瞬殺だよ。」と笑い飛ばした。

そうしないと壊れてしまいそうだったから。

それから依頼場所に移動した。

草木以外は何もない草原。本来一般人の来ていいところではない。

今回はハンターだから許されている。危険ランクはC-A。

A地域に入ってしまうと俺でも生きて帰れるか分からない。今日はB地域だから気を抜くことは出来ない。

一歩踏み出すと灰色の物体が視界を横切った。

すぐに近くにあった岩に跳び乗った。灰色の毛並みに鋭い牙、クラストン特有のハイエナを思わせる厳つい顔が20近くあった。

左腰に結んでいた西洋剣へカノンを握り切りかかった。

一斉にクラストーンが突っ込んでくる。右手に握ったカノンを横一閃に切りつけると血飛沫が地面に垂れていく。

斬られたクラストーンはその場に倒れた。

地面を蹴り残りのクラストーンにかけて横に跳んだ。

クラストーンは俺を見失ったようで30メートルほど先で止まり俺を確認すると再び突っ込んできた。

「血飛沫滴り、我に仇名す者を這い蹲らせよ、黄泉の灯火」

カノンの刃先に黒い灯が灯った。それをクラストンのほうに向け縦に振り落とした。

ひらひらと空中を漂い地面に降れた。

地面から瞬く間にどす黒い焰が湧き上がりドーム状に広がりクラストーンを包み込んだ。

カノンに付いている体液を払い焰が無くなるのを待った。

消えると何もなかった。俺はクラストンの居たであろう場所の砂を摘み胸の内ポケットから殻のビンを取り出し土を詰め蓋をしてしまった。

足音が聞こえたので振り向くと男が居た。

「へえ、ガキの癖に中級魔法が使えるのか。今回は当たりだな。」

男は薄気味悪い笑みを浮かべながらこちらに近付いて来た。

俺は静かに男の動きに目を凝らした。

それも気にしないで距離を狭めてくる。

「お、かなりのイケメン君か。とっとと捕まえて捌くか。」歩くのを止めて魔法を使おうとしているのが分かった。

「焼き尽くせ、『猛火』」10メートル程の炎が男に襲いかかった。

「詠唱契約もしてるのかよ。最高じゃん。300万はいくかな。久しぶりにいい酒が飲めるな、流鬼^{リュウキ}」

男の左手から澱んでいる水が溢れて地面に落ちていく。

水は地面に染み込まずにひたすらに溜まっていく。

その間にも猛火は接近していき男に当たって弾けた。

砂塵が消えると失神している男の姿が見えた。

（はあ、一応ギルドに連れて行くか。）俺は男を背中に乗せてから歩き始めた。

「バツカじゃあねえの、破心^{ハシンノホコ}の鋒」

投げつけようとしたが左手を掴まれた。

何とか振りほどいてカノンを両手で握り締めた。

斬りかかろうとした時鮮血が辺りを染めた。焼ける様な痛みが右肩が突き抜けた。

「え・・・」あまりにも間拔けな声がこぼれた。そのまま地面に倒れた。

だんだん近付いてくるのが見える。

髪を鷲掴みにされて男の笑っている顔が見える。

異様な色の鋒を刺そうとしているのが見える。

「これからは敵は戦闘不能にしたのを確認しろよ、まあ次なんてないけどな。」

「イバラノコウロウ 荊の高楼」男の下にノバラ野薔薇が咲き乱れていた。声を出す前に荊が円柱状になり姿が隠れてしまった。

荊は男を入れたままとてつもない速度で成長していき小さくなり姿は見えなくなった。

日本刀を荊の根元に刺すと破裂音が聞こえた。想像してしまい想像を払った。

真っ赤なバラの華が舞っていた。

「おい人殺しなんで助けた。」睨みながら答えを待った。

「お前からすれば俺は『敵』だ。だが俺はお前をなんとも思っていない。」

たまたま今回は俺の標的がお前を襲ったからお前が助かったただけだ。偶然だ。

偶然に意味なんてない。あと少しで別の密猟者がここに来る、死にたくなかったら逃げればいい。」無機質な声でそれだけ言うと言った。あつたほうに歩いていった。

そして土を空き瓶に入れて日本刀の鞘の中に入れた。

俺はその姿を一度だけ見たことがあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1881e/>

SNOW

2010年10月11日01時11分発行